

2002.2/1

# 中村 哲 医師の診つづけてきた アフガニスタン

— 真実とは、社会正義とは —



発行：NPO法人『風に立つライオン』

---

# ごあいさつ

NPO 法人『風に立つライオン』

理事長 堂園晴彦

(2001年10月28日 鹿児島での講演録)

---

四日まえに中村先生から、「医者 井戸を掘る」という新しい本が届きました。そのなかの一節を読ましてもらいます。

「日本全体が一種の閉塞感に悩んでいた。しかし私が帰国して感じたのは、あふれる物にかこまれながら、いつもなにかに追いまわれ生産と消費を強要されるあわただしい世界であった。静かに淀んだような閉塞感で、往時の活気はなかったが私には不平不満の理由が、よくわからなかったのである。飢えや渇きもなく十分に食えて、家族が共にいれる、それだけでも幸せと思えないのか、というのが実感であった。生死のはざまから、突然日本に身をさらす者は、名状しがたい抵抗と違和感を抱くだろう。美しい街路には商品があふれ、デフレであっても決して生活が逼迫しているとは思えない。飢えた失業者の群れがあふれているわけでもない。携帯電話をさげた若者、パソコンの大流行、奇抜なファッションで身を飾る一群の世代の姿は異様であった。この国の人々は何が不満で、不幸な顔をしているのだろうと思った。しかし、そんなことをのべたら偏屈者として嫌われるだけだ。私も歳をとったのか、無用な論議に口をはさむのがおっくうになっていた。あの飢餓、旱魃、戦火についていかに説明を尽くしてもわかるまい。仏石破壊やタリバンについてもそうであった。沈黙に如かざるはない。まるでガラス越しにみるように日本人の生活のさまを見ていた」

今回のニューヨークでのテロやアフガニスタン攻撃がなければ、中村先生の存在は、一部の人以外は知りえなかったのではないかと思います。しかし、悲劇を媒介としてですが、多くの日本人が中村先生の存在、17年間の地道な活動を知り、日本のなかにも真に尊敬のできる人がいるということを感じたと思います。みな、胸をあつくし勇気をもらったと思います。

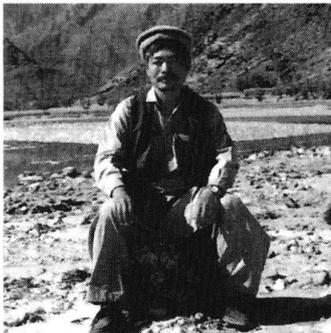
今回のテロやアフガニスタンで、一般の方々がたくさん亡くなっています。亡くなった方々の魂は、真に大切なものはなにかとか、命とはなにかとか、幸せとはなにかというようなことを訴えてほしいと、声をあげているような気がしてなりません。そして、そのようなことを考えることこそが、犠牲になった方々の冥福を祈る唯一の方法だと思っています。

私は8月上旬に中村先生と博多でお会いし、鹿児島での講演をお願いしました。テロの1カ月前です。テロが起こったために中村先生がお忙しくなり、鹿児島での講演が実現できるか心配しておりましたが、実現できて大変嬉しく思っています。

本日の中村先生の講演が、命の大切さを中心に据えた新しい鹿児島の文化の第一歩になり、それが日本中に広がることを期待しております。昨日の朝日新聞に、中村先生は書いておられます。「敵は、実は我々自身の心のなかにある。強いものは暴力に頼らない。最終的に破局を救うのは、人間として共有できる希望を共にする努力と祈りであろう」と。

本日の講演が、希望を共にする努力と祈りの第一歩になればと思います。

## 中村 哲 (なかむら・てつ) プロフィール



1946年福岡市生まれ。

九州大学医学部卒。専門＝神経科（現地では内科・外科もこなす）。国内の診療所勤務を経て、1984年パキスタン北西辺境用の州都ペシャワールに赴任。以来17年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、主に貧民層の診療に携る。98年には基地病院PMS（70床）をペシャワールに建設、パキスタン山岳部に2つの診療所も併せ持つ。

1986年からはアフガン難民のためのプロジェクトを立ち上げ、現在アフガン無医地区山岳部に3つの診療所を設立して、アフガン人の無料診療にもあたっている。

また病院・診療所で患者を待つだけでなく、辺境山岳部へも定期的に移動診療を行っている。現地スタッフ（パキスタン人・アフガニスタン人）約220名を指揮し、年間約20万人を診療している。

今世紀最悪といわれる旱魃に見舞われているアフガンに、医療活動の一環として水源（井戸・地下水路）1000本を確保するプロジェクトに取り組んでいる（2000年7月～）。

さらに2001年3月からは、国内の飢餓難民の押し寄せる首都カブールに臨時診療所5ヶ所を設置、10月からはジャララバード、カブールの極貧層を対象に食糧配給プロジェクトを始動し、国外への難民流出を食い止めるための事業を開始。

- 著書に『ペシャワールにて』『ダラエ・ヌールへの道』『医は国境を越えて』（アジア太平洋賞特別賞）『医者井戸を掘る』『アフガニスタンの診療所から』等がある。
- 受賞歴 外務大臣賞（88年）毎日国際交流賞（92年）西日本文化賞（93年）読売医療功労賞（96年）朝日社会福祉賞（98年）

# 中村 哲先生 講演

エー、バカボンパパの中村でございます(笑)。これはアフガニスタンとは関係ありませんけれども、ときどき「先生と会ってほっとしました」と。「なんでですか」と聞きますと、「普通の人で」と。あの、普通の人ですので、そのつもりでお話を聞いていただきたいと思います。別にかわった人間ではありません(笑)。

ホスピスの病院を運営しておられる堂園先生と、前々からこの集まりは予定されておりまして、ホスピスというのは、ガンなどで死ぬ間際の医療をする医療行為ですね。それとアフガン問題がどうやって結びつくかと。まるで謎解きのような話でございますが、同じ医療に携わる者としてやはり通じるところがあるわけですし、命の貴さとも申しますか、そういうことで結びつくんだろうと思います。

現地の情勢について説明してくれと、よく言われるんですけど、いったいなにかから話していいかわからない。私たち「ペシャワール会」の17年の歩みをそのまま皆さんにご紹介することが、いい現地理解になるのではないかということで、スライドを、後



ほどみなさんと見ながら、ご紹介します。

アフガニスタンという国は、最近はまだ新聞・テレビで出ておりますが、初めのうちは「アフガニスタンて、どこにあるとですか」という質問が多かったんですね。それを説明するのに苦労しておりましたが、最近はいよいよ地図が出ておりますので、皆様の頭に入っていると思います。

私たちの活動地は、昔、西パキスタンといわれていたパキスタンのずっと北のほうのペシャワールという町、アフガニスタンとパキスタンの国境の町です。ここを拠点といたしまして、一つの病院を基地病院として、合計10カ所の診療所を運営しております。現在アフガニスタン内部で8カ所、パキスタンで2カ所の診療所を運営しております。空爆が開始されたあとも、何事もなく運営されております。スタッフ交代も行なわれておるといって状態

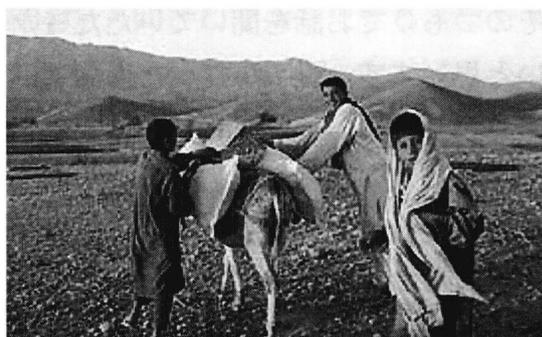
す。

## 《アフガニスタンという国》

現地の特異事情といえますか、日本人のかたに説明してもなかなかわかりにくい点といえますのは、まず、現地は乾燥地帯でございます。降雨量が日本の約200分の1、しかも乾燥した砂漠あるいは岩石砂漠といってもよろしいのですが、国土の大半を占めるのがヒンズークシ山脈という大きな山。これはパミール高原、世界の屋根といわれるところを中心にしまして、東にヒマラヤ山脈、西に伸びるカラコルム・ヒンズークシ山脈、このヒンズークシ山脈というドでかい山が、デンとアフガニスタンのなかに居座っている。アフガニスタンの面積が日本の1.7倍、しかしその3分の2以上はこのヒンズークシ山脈で占められておりまして、日本列島を合わせたよりも大きい。しかも5000、6000、7000メートルのピークがずらりと立ち並ぶ光景であります。無数の谷があるという意味では、日本の地形を膨らまして大きくしたような山の国ということが言えます。

空からみれば美しい光景ですが、私たちの活動は、この谷間の村をときには馬に乗ったり歩いたりしながら診療活動せざるをえない、というところが

ほとんどでございます。ちなみに、いちばん遠い診療地点で片道一週間というのはザラにあるんです。だから、山のなかに行って「ここから目的地までのくらいですか」と聞きますと「すぐ近くです」と。歩いても歩いても着かない。「いや、すぐそこです」と、また歩く。また聞く。とうとう日が暮れる。で泊めてもらったところで聞くと「歩いてあと3日」(笑)と。これは近いうちなんです。



現地では距離を表わすのに我々のように何キロとかいう距離でなく日にちで表わす。「ここからどのくらいですか」というと、「普通の人足なら5日、強い者で4日、弱い者なら6日」と、日にちで計算する社会なんです。1、2時間の遅れなんてたいしたことありません。日本ではこれが非常な違いになるわけですね。何事にも、時間の流れが大きい。

いいか悪いかは別として、このように山の国ですから人間も鷹揚であると。人口2,000万人。95%以上が農民と遊牧民です。こういう農業社

## 主要活動地域



す。またあとでお話しますが、ここを襲った大旱魃というのがものすごいもので、この山の雪がだんだん無くなっていくと。

もともと私は山登り屋でしたが、二十数年前に行ったとき雪線が3500メートルでした。が現在では4000メートル行っても雪がない。もしこれが地球温暖化による変化だとすれば、これは大変なことです。この状態が数年続けば、現地は砂漠化して最低1000万人以上の人々が物理的居住空間を失うということで、ともかく私たちとしては大混乱を防ぐために、とりあえず人工井戸とか、生き延

びるための旱魃対策を行っていたわけでありませぬ。そういうふうには、現地は日本とはテンポの違う、山の国というのが全体の色調です。

会でシルクロードの昔は貿易中継地点、いまならさしずめロンドンとかニューヨークとかでしようけど、かつてはシルクロードのインド側の起点として栄えたところですよ。

乾燥地帯ではございますが、こんな山がありますので、冬の間降りつもった雪が夏に融けだして川をつくりそれが大地を潤すということで、何万年かわかりませんが、これによってたくさん人間と動物と植物が恩恵を受けてくらししてきたところでございます

### 《イスラムということ》

もうひとつは、ご存知イスラムの世界です。私の印象では、世界でもっとも古典的な、もっとも骨董的なイスラム社会が現地で息づいているということです。かといって無秩序かという

と、そうではありません。とって私たちが考えるような国家、アフガニスタンというひとつの近代国家があって選ばれた政府があって、それでみんなが支配されているというのとまた、違うわけです。

日本人が選挙に行って投票して議員さんをえらんで日本国政府があって三権分立で国をまわすという体制とは、ちょっと違う。イスラム共同体というのが各地域の中心にありまして、その象徴がモスクです。その地域、鹿児島なら鹿児島にジルガー長老会、がある。そこもまた薩摩、大隅に別れていまして、そのなかに昔でいう隣組があるという、階層的な長老会、その地域のリーダーが集まって構成される、遊牧民的いわば部族社会なんですね。

金曜礼拝のとき、モスクにみんな集まる。社会的問題も、そこで結論が出るのです。たとえば昔、鹿児島にイギリスが攻めてきたとき、別に幕府に知らせるといってわけではなく薩摩独自で錦江湾で戦ったと、それにやや似ているわけです。だから各地域が割拠性を持ちながら独立して、それぞれ自治的体制で運営されている全体の国家——いわば明治維新前の、日本の幕府と各藩という関係に近い権力の成り立ちです。しかもそれが藩よりまだ小分けされておりまして、たとえば指宿の長老会とか鹿児島市でも南、北とかその下

にまたあるとか。ただし、共通する慣習法を厳守してまわされている社会と。

いま日本人の誤解は、タリバンという悪い奴がいて、アフガン人を支配していると、タリバンを倒して善良な政権をたてれば国民はみな従う、と。どっこいそうじゃないわけです。

ソ連が約22年前、現地に10万人の大軍で侵入いたしました。共産政権を擁護してアフガニスタン全土を共産化しようとした。結局7年後に出ていかざるをえなかった。ソ連軍10万人の世界最強といわれた陸軍が鎮圧といえますかコントロールできなかった地域を、わずか1万5000人の軍隊でその9割を制圧するというのは不可能であります。これは権力の底辺にこういう長老会の支持があったということです。言っておきますが、私はタリバンの回しものではありませんので。(笑)

このペシャワール会というのは、タリバンよりも古うございます。

タリバンは94年に発生して96年にカーブルが落ちましたけれども、実体は各地域のジルガ・長老会が「タリバンが来た、これと戦うべきか否か」と、あるいは「これを受け入れるべきか」ということを決定して、そのころみんな戦乱に疲れておりまして、とにかく治安を守り、平和な暮らしを守ってくれればそれでいいと、タリバンを

事実上歓迎した。そして短期間のうちに9割の国土を治めるということが可能になったわけです。

正義の味方アメリカと悪の権化タリバンという構図自体、無理があるんです。

タリバンだけをやっつけるというけれど、誰がタリバンかよくわからない。脱線しますが、私たち井戸掘りのプロジェクトをしているとき、ほとんどの家庭は武装しているんです。いつでも外敵に対してはバラバラに戦うという地域ですから、ほとんどの村、溪谷が武装している。でタリバンが侵攻したあと、まず刀狩りということが行なわれておりました。井戸を掘っているときに私が見回りにいきますとライフルや機関銃がおいてあったので「こんなもん、いまどき持ち出しているとタリバンにつかまるぞ」と言いますと、井戸底から「おおい、上げてくれ」と声がして、出てきた地元のお百姓さんが井戸掘りをしていたのに「そろそろ見回りの時間です」と銃を担いで行く。誰がタリバンなのかわからない。そういう状態です。

### 《多民族を束ねる掟》

こういうふうに民族部族はバラバラでも、共通の慣習法で寄り集まってアフガニスタンという同一性は形成され

ております。ほんとにアフガニスタンというのはいろんな人種がいるところです。民族だけで30以上あるといわれております。で、顔もいろいろで、アフリカの黒人系以外はすべてアフガン人に化けられると言われております。

私も昔ですね、まだ内戦たけなわのところ調査をしておりました。国境を通過するとき、そのときだけは車でしたが2、3台後ろの車が国境で停止させられて日本人だと言うことで捕まった。で、行ってみますとトルコマンといって非常に日本人に似た人だったんです。私も現地服を着ておりましたが、私は怪しまれずに通りました。私がパキスタンのお巡りさんのところへ行って「いや、この人は違うよ、アフガン人だよ」とペルシャ語で説明して釈放されると、それくらいいろんな民族が住んでいるんですね。

この人たちをいかに統一していくかと。私たちのチームは先ほど説明がありましたが、いろんな人たちからなっておりますが、こういう人たちを束ねていくというのは、私たちグループのなかで厳しい掟が必要だと。

それは民族・国境を超えてひとつの命を助けるという医療活動を行なうと、特に貧しいといえますか。いちばん恵まれないところ—多少恵まれているところ、いちばん恵まれているところは誰かがやりますから、貧しい人々

にたいして全力を注ぐということを鉄則といたしまして、これを私たちの掟としております。

同じようにアフガニスタンのなかには長く定着した不文律がありまして、明文化された法律はないけれども、共通の慣習法にのっとって国がまわされている。

そのひとつが「客人歓待」、お客さんを非常に大切にする、旅人をもてなす。それから「復讐法」、目には目を、歯には歯を、というものです。また、そのなかの一つとして女性の被りものなんかがある。これは何世紀もそこで行なわれてきた風習ですから、我々とはやかく言う必要ないです。しかし、外国人にとってはどうも鬱陶しい。鬱陶しいだけならまだいいけれど、これが人間の道に反すると言い出します。すると当然地元の人には嫌うわけですし、地元はそれで社会秩序が成り立っていますから、異物として排除されるわけです。たとえば外国人が突然やってきて「日本人は米がなければ、パン食えばいいじゃないか」とか「味噌汁なんて臭くて飲めないからコーンスープを飲みなさい」と強制されるのに近いでしょうね。

つまり人の他所の文化を、自分の尺度でもってながめて自分たち好みにアレンジしようというのが世界的に非常に悪い風潮だと、私たちは思うわけで

す。

けれどもそれが現実になされている。たとえば女性の被りもの、これは許すべからざるセクハラだということで、人権活動家が騒ぐ。それから公開処刑、これも普通に行なわれている慣習法であります。

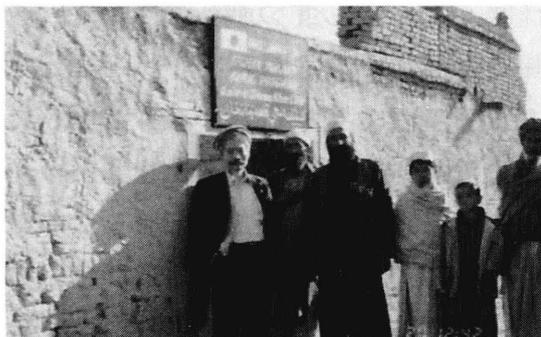
たとえば女性に対するいたずらというのは、現地では非常にきびしく取り締まられる。婦女暴行はちなみに死罪であります。たとえば沖縄で起こったような事件が起これば、住民が警察に相談しなくても自分で捕えて処理する。それも公開処刑、つまり地面に肩まで埋めましてみんなで石をなげて殺すということを行います。これは犯罪の抑止力になるんです。こうして現地では女性に対するいたずらというのは、ほとんどない。そんなことをすると、本当に殺される。

### 《ペシャワール会の発足》

「ペシャワール会」は福岡に本部があります。年間予算1億円。80%が会員の募金です。医療関係者20数名、現地スタッフ数千名、水源確保のスタッフが700名ほど。活動資金の90%以上が現地で使われており、維持費はほとんどありません。ということは事務関係は手弁当ということで、小さくても力のある団体です。

私たちの活動は、いまから17年前、1984年5月、現地のハンセン病コントロール計画の手伝いをするということが発端でした。パキスタン北部のハンセン病患者が2400名だったと覚えておりますが、その後増えに増えて、というのは診断されて治療を受けている人の数がそれだけであって、受けていない人が今だにたくさんいます。最終的に2万名は下らないだろうと我々はみております。現在、約7000～8000名の方がハンセン病と診断されて治療を受け、その数はますます増えております。

ハンセン病の治療施設がまともにならないから、その治療センターをなんとか立て直しをやってくれと依頼がありまして—依頼というか、頼みがありまして、まんざら知らないところでもありませんから、と行ったのが発端です。



行ってみると2400名の患者に対してベッド数は16床、ピンセットが数本。ガーゼをなんで消毒したかという、金属のボールのなかにいれて蓋

をしてオーブントースターにいれて煙が出るまで待つ。煙が出かかったころパッと出す。これは技術がかなりいりまして、ほっとくと燃えてしまうんです。で、キツネ色に焦げているのが消毒済みと。そういう状態で始まったわけですけども、いくらなんでもこれはひどすぎる、と。こわれた注射器、ディスクの奴を何遍も洗って使う、洗ってるだけで消毒しない。それと壊れた聴診器一本。医療は物や金ではないと言いますが、ある程度ないところやたいへんだというわけで、ペシャワール会の活動が活発化していったわけでございます。

現地では日本のような隔離の習慣はありませんが、ハンセン病の合併症といいまして—ハンセン病というのは、ただ薬をやれば治るというものではなくて、目や手や足や顔が侵される。皮膚や末梢神経がやられる。そのために麻痺がおきる、怪我をしやすい。目のケアが必要であり、麻痺した手足を治す整形外科的な手術がある。あるいは形成外科といいまして、顔の変形が起きると社会生活に影響を与えますので、若い女性などその形成をする。ということで整形外科、形成外科、皮膚科、神経病理学、内科学といろんな分野が総合的にひとつの分野を形成しております。このライの診療は多様な治療法が必要である。

現地は貧富の差が激しいところでございまして、金持ちといえどつもなく、ちょっとした病気でもロンドンやニューヨークへ平気で行ける。でもお金のない人は、わずか数百円のお金がないために、命を落とすという社会です。ちなみにうちの門衛の月給が、初任給で6000円。これで都市生活者の最低限の暮らし。もちろん物価が安いこともありますが、大金持ちと貧しい人の差が甚だしい。人口の1割ぐらいで8割以上の富を占めるという構図になっておりまして、数%の人は先進国と自分の国を自由に行き来できるし、学校もケンブリッジとかニューヨークのなんとか大学卒業とか、ほとんど西欧化している。とくにパキстанは昔イギリスの植民地でしたから、それが簡単に出来る。

そのなかで私たちが気を使うのは、いかに少ないお金でいかに多くの人に恩恵を及ぼすかと。日本流の医療はもちこめないということです。レントゲン一枚とるにも、彼らにとっては相当な出費になるわけです。そういうなかで、なるべく安くて効果の上がる治療法を工夫せざるをえないということです。

その後アフガン難民の診療も始めまして、ハンセン病だけでは駄目だと。というのは、ハンセン病の多いところは同時にほかの感染症——マラリア、

結核、デング熱、腸チフス、赤痢とありとあらゆる伝染する病気の巣窟なんです。しかも、こういう病気が多いところはおおむね山のなかの誰もいかないうような山村部の無医地区に多いということで、私たちは方針を大転換いたしました。

当時アフガン戦争のまっただなか。ペシャワールに流れてきた難民が国連発表で約270万人、この戦争で死亡した者が200万人という状態でしたが、当時は農村、我々のターゲットであるところが戦場でありましたので、ノコノコ出かけて行くわけにいかない。しかし、ソ連軍もいつか撤退するであろうという長期的見通しで、私たちはペシャワールで人を育てながら、じっと内戦が終わるのを待つ。一方で現地の人たちとコンタクトを広げつつ、診療所の開設を計画していたわけでございます。

こうして少しずつ戦乱の山のなかを——私、幸い、頭は弱いですが足と口が達者でして、と言いますのは、だいたい現地はペルシャ語とウルドゥ語とパシュトゥ語と英語を知っていれば通じる。で人々と仲良くしながらいわゆる偵察診療というのを続けながら、どこにどういう病気があるのか、どういう人が住んでいるのか、何人人口があるのか、という調査を続けておったわけです。

## 《ソ連軍の撤退と内戦》

そうこうしているうち、ほんとにソ連軍が撤退し始めまして、1988年撤退、94年撤退完了しました。当時の国際社会の反応は—西側東側というておりましたが—ソ連が帰る、これで難民たちも帰るだろうということで、難民帰還プロジェクトというのが大々的に始まりました。

88年、ソ連軍の撤退 同時に「アフガン難民帰還援助プロジェクト」と称して、約300以上の国際団体が殺到いたしました。で約200億ドル、これにゼロをふたつ付ければ円ですのでだいたいの想像がつかますが、このお金によって帰った難民はほとんどいなかったというのが実情です。というのはソ連軍撤退後もアメリカが反政府勢力に武器援助し、ソ連は共産政権側に武器援助を続けるというなかで、内戦はますます激しくなるとても帰れるわけがない。そうこうすると湾岸戦争が始まる、ソ連そのものが解体するという事態—とくに湾岸戦争時には、欧米人を中心に一斉に外国人は退去いたしました。こうして難民帰還プロジェクトは、200億ドルを数年で消費したまま、あっという間に消えたわけでございます。

ところが92年になりまして共産政権が倒れ、今日の都カールを目指し

て一斉に各地方の党派が攻め上っていくと。そのため、それまで幅をきかせていた彼らがいなくなった地方の農村では、住民の自治が復活してくる。ちなみにあのころ、ソ連・共産政府対各党派ゲリラの戦い、と新聞でも報じられましたが、実際に前線で戦闘に従事していたのは、地元住民そのものであったわけです。けっして政治党派ではなかった。始めは地元住民対一部の政府軍・ソ連軍という図式でしたが、だんだん外国の武器援助が入るにしたがって、そういう政治政党だけが肥大していくということで、タリバンもそのひとつでありました。で、ますます事がややこしくなる。

しかし、ともかく農村の自治が復活してくるなかで、一斉に難民たちは誰の力も借りずに92年—いまでも憶えています、92年5月から12月に270万人の難民のうち200万人が誰の力もかりずに帰って行った。このことは、ほとんど報じられませんでした。ま、こうやって私たちの、やっ活動のチャンスがきた、ということで、これを機に猛烈な活動がアフガニスタン内部ではじまったのでございます。

## 《内戦のあとの大早魘》

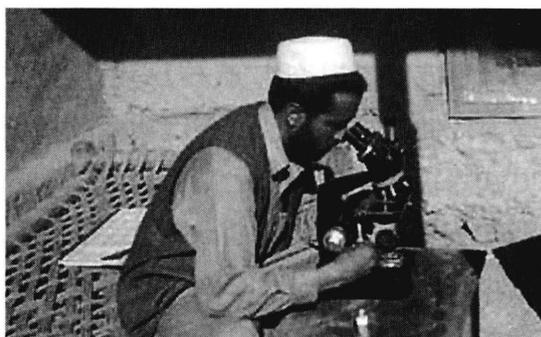
やっと本格医療をといるときに、ほ

んとに事の多いところでして、昨年、大旱魃が襲いまして、被災者がアフガニスタンだけで1200万人、うち飢餓線上にあるものが400万人、なかでも100万人は餓死線上、もうすぐ死ぬというふうに国連が発表したのが昨年5月。これによって強く世界中にアピールされましたが、国際社会というのは、政治的利害がないと関与しない。ほとんど放置された状態でありました。巨大な貯水槽である、山の雪が消えたのです。地球温暖化の現象です。

こんなエチオピア以上の大旱魃が、世界に知らされないはずはないと、いずれ国際救援が殺到するであろうと、そのときは退け時で、それまで我々ががんばろうと。一生懸命やっていたら、やってきたのは援助ではなく国連制裁。これには日本も参加しましたけれども、2001年1月からアフガニスタンは制裁を受ける。なんと、この100万人が死にかけているというなかで、食べ物の搬入が禁止される。こ

ういうことは許されていていいのか、と。これは国連の地方職員が猛反対いたしまして、食料だけは項目から外れたということです。そんななかであの大仏破壊が行なわれたのです。「雨乞い」の儀式としてしたことなのに、ほんのことは何一つ報道されなかった。

そして一斉に外国人は退去いたしまして、アフガニスタン中からの避難民であふれるカーブルの町は巨大な無医地区と化しました。で、人が行かないなら我々がやろうということで、2001年3月から5カ所の診療所を運営しております。さらに、これを10カ所まで増やすという矢先に、今度のテロ事件と報復爆撃が始まったわけでございます。



ここからはスライドを使っの講演になりました。

さきほど話しましたように、当時は各村が攻めてくる外敵に対してバラバラに戦う。男たちは村に残って戦い、子供・お年よりは安全な難民キャンプに移す。このなかで現地との接触が始

まったわけです。

外国人なんかが見たこともない村がたくさん、というより地元の人が外国人を見たことがない。このスライドの村は、ヌーリスタンのなかの一つの村

でしたが「ドクターはフランス人ですか」と言われた。私はそんなに顔立ちがいいのかと(笑)。見てわかりそうなもんだ。どうも、外国人を見るのが初めてだったようです。

日本人というとても非常に喜びまして—現地は非常に親日感情の強いところですよ。どんな山奥に行っても、日本という国を知らない人はいない。なんでかということ、日露戦争。そしてヒロシマ・ナガサキということで、どんな人も知っているんです。日本は自分たちと親しい国、恐らく彼らのあいだで一番人気のあるのは日本です。しかし、日本に関する知識はあまりなくて「歩いて何日かかりますか」とか、「オランダの隣にあるのですか」とか。

ともかく現地の親日感情は誇張ではなく、なみなみならぬものがある。中近東全体がそうですけれども、とくにアフガニスタン・パキスタンはいいんです。

さて、難民は、誰の力も借りずに帰ってきたのが92年でした。

難民の大半は農民ですから、帰ってみると村は爆撃されて家がない。畑は荒れ放題というなかから、我々は今こそ活動する時が来たということで、次々に診療所を建てていきました。側面からアフガニスタンの国の礎となる農業、農村の復興援助を—人間困ったときになにが頼りになるかといいま

すと、電化製品は食えないです(笑)、やっぱり食べ物なんです。側面から農村の復興を援助するということです。現在あります山岳部の診療所というのは、この時期から次々建てられたものであります。

もともと無医地区でしたが、このころには100名近い医療グループに育てられて、月交代で送る体制を作っておりました。お医者さん、検査技師、看護師で一チーム各診療所に配置しておりました。いままでお医者さんを見たことがない(笑)と、これ本当の話です、大半の山のなかではそうなんです。難民が帰ってみると、お医者さんがちゃんという、ということで大いに地元から信頼を寄せられたわけですよ。

とくに今度の報復戦争に関してみなさんにお伝えしたいことは、このころのエピソードとして、マラリアの大流行があった。難民が帰る、水田が復活する、そうすると蚊も繁殖する、そして、マラリアが大発生する。それも悪性で、クロロキンという安い薬が効かない。ふつう子供が犠牲になることが多いのですが、いちばん働き盛りの人も含めてバタバタと死んでいった。

私たちはアフガニスタンの東部といっても、カバーできる範囲はわずか70~80万人の地域です。そこで確実に死亡を確認したものだけで約60

00名。診療所まで何日も歩いてくる人もいるわけです。その前に果てるという方もあったでしょう。そのためにパニック状態になりまして、診療所に次々患者たちが押し寄せる。私たちも朝から晩まで働いても、せいぜい2～300人診るのが限界です。しかし、みんな歩いてやってきたり家の人が次々に倒れるなか不安にかられてます。我々としては自分の体力もありますから「すみません、明日の朝きてください」と言わざるをえない。すると不安にかられた住民が興奮して投石が始まる。投石ならいいけど、飛び道具が飛んでくる、ロケット砲が頭をかすめる。ロケット砲は、そのころ対戦車砲が出回っておりまして、うちの準職員が2名殉職いたしました。

普通は「目には目を」で2名殺されたら我々も殺しかえさないと不名誉になる。侍の仇討ちと違っていい。だからうちのスタッフは、協力者を集めて「これは断固制裁すべきだ、2名は殺さない」と。私が「医療者ともあろうものが人を殺しちゃいかん」というと「先生、気でも狂ったんですか」と。これは向こうの慣習法ですから、そうなんです。でも、いかんと。「このまま皆殺しにされてもですか」、「そうだ」と。「撃つ奴はおれが発砲する」と。さすがに沈黙して、幸い、それ以上の犠牲者は出ませんでした。

で翌日、例の長老会を谷で開かせまして、私はめったに人を怒鳴りつけたりしません。「我々、朝から晩まで働いておってなんの下心もなくやっているのに、きのうの仕打ちはなんであるか。首謀者を出せ。また、この診療所が必要なら君たちで守ってくれ、治安を維持しろ」と。長老会もさすがに謝りまして「診療を続けてください」と。じゃあ薬を持ってこようと、またさんざん苦勞して山越えをしまして、福岡の本部のペシャワール会に電話して「おい、ありったけのゼニをぜんぶ送ってくれ」というと、「先生、30万しか残っとらん」と。

ペシャワール会というのは不思議な団体で、自転車操業で18年間、ようまあ続いたもんだと思います。当時、難民が帰るということで多額の費用が必要で、福岡にはお金がなかった。「30万でもいいから送ってくれ」といいかけて、ゾツとしたのは、この金額で何人が助かるだろうということでした。当時、キニーネを治療薬として使っておりましたが、その代金が一人あたり約220円。で30万÷220が助かる人の数。すると1400名ですか。そのくらいしか助からない。気の毒ですが、あとの何万人かは死んでもらわなくちゃいけない。

その時思ったのは、人の命は平等とか、よく言うなど。ほんとに平等か、人

間の命が平等というのは値段ではなく、別のところにあるのではないか。ほんとに平等と、みんな信じてないのではないかと、そのとき痛感したわけです。

幸い、このときばかりはマスコミに感謝いたしましたが一これをニュースで流してくれました。そこで2000万円の募金が寄せられました。その後数年間、これを基金にしまして、村から村を回ってマラリアを潰していくことをやりました。これによって私たちの活動も現地で絶大な信頼を得まして、東部一体で自由自在に動けるようになったわけです。

まだ道路があるところはましなんです。ほんとに困ってるところは道路もない、車も行けないところです。アフガニスタン内部だけでなく、パキスタンの山岳地帯でも同様に、無医地区のジープも行かないようなところを次々と診療活動を拡大しております。

中村は山がもともと好きだったんだ、というふうに邪推される方もおられますが、決してそうではなくて、ほんとに我も我もと行くところは我々は行く必要はないのです。誰かがやるのです。ほんとに困っているのに誰もいかない、あるいは行けないということを選んで行っておるわけです。

このスライド（崖に建っている民

家）はヌーリスタンと呼ばれる地域のありふれた民家の光景です。こんなところでは、私たちがペシャワール、カーブルで立てた計画なんてとても実行できない。「山村部の無医地区における衛生問題」などと話すだけに空しくなりますね。現地においてさえともに立案できないのに、ジュネーブや霞ヶ関のデスクでできるものではない。かといって私たちがなにか特別な方法論を持っているか、私たちもよくわからない。ともかく、こういうところではそばそと外来診療を続けながら、まずはこの住民たちがどういうことで嬉しいのか、なにが悲しくて不幸なのかということをしつづつ理解しながら、共により良い道を探っていこうという段階なのです。



そうこうするうちに15年が経ちまして、先は長いと。始めは簡単に考えて—今の米軍がそうでしょうが、知れば知るほど容易なところではないと。20年30年ではおさまりそうもない。ここでいったん区切りをつけて、アフガニスタン・パキスタンを統

合してパキスタン政府が認可し、ペシャワール会が支えるPMS「ペシャワール会医療サービス」というひとつの組織にして、第一期終了と。3年前ですが、第二次計画を30年としまして今年で3年目に入ったところです。ちなみに病院もすべてペシャワール会の会員の募金によるものであります。7000万円を投じて、現地で建てられました。我々は現地国籍で、NPO・医療福祉法人としてパキスタン国籍の組織であります。これを支えるのが日本のペシャワール会という関係で運営されております。



そこでやっと組織の統一がなり、あの基地病院を中心に着実に仕事がすすめられる足場ができた、というところでした。私たちとしては、どうもこのごろ患者が多いなど、で、いってみますと患者が長い列をなしている。お母さんが多い、赤ちゃんや子供を抱いて、1日2日をかけて診療所にたどりついた、と。ほとんどが下痢による脱水症。これで相当命を落としまして、なかには待っているあいだに自分の子

の体が腕のなかで冷えていく。そんな姿が普通でした。

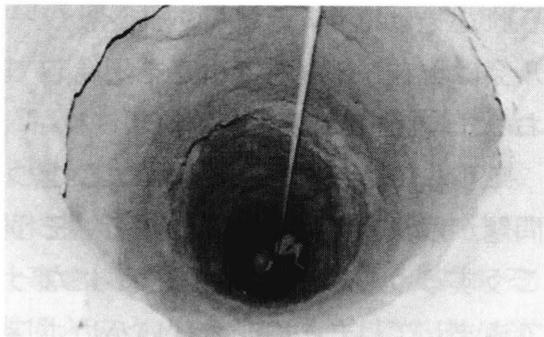
「なんでだ」と。私も迂闊でした。飲み水がないんですね。

畑が枯れるだけではなくて、飲み水がない。で汚い水を飲む。わずかな水源まで何時間も向こうから歩いて水瓶をさげてきて、何日も家のなかに置くから、水は不潔になりやすい。泥水を啜る状態のなかで、当然、下痢も病気も蔓延します。こりゃ、抗生物質なんかやってたって駄目だ、先ずきれいな水を確保しなければ。おまけに飲料水がないと人間だけではなくて、家畜が死ぬ。お百姓さんたちにとって家畜が死ぬというのは致命的なことです。みんな家畜が死にそうになると、村を捨てる。大きな町にいった家畜を売りはらってそれで生活する。そんな状態で次々に廃村が広がっていった。

こんななかで医者があること言っちゃいけません「病気でもなんでもいいから、ともかくいまは生き延びとってくれ」というのが正直なところでした。



そこで、きれいな水を、ということで診療所から発しました。遠いところから水瓶やポリタンクをさげてやってきます。



このアフガニスタンの旱魃地帯、東地域に限定した動きでしたが、現在まで水源確保を展開してきたわけです。水が出ると、みんな喜ぶんです!!

スライドのこの村は数ヶ月も水無し。数千名の村人が遠く、歩いて、半日はかかるような遠い所から水を持って来ていた。さすがにきれいな水が出ると、みんな村に残ると、つまり村を捨てない。

地域によっては飲料水だけではなくて、灌漑用水、地下のカレーズとかカナートといいますが、これを次々と修



復いたしまして、乾燥地帯の難民が戻って来れるように緑化する、そうして、小麦の畑が復活するという地域があって、1万数千名が帰って来るという嘘みたいなこともありました。

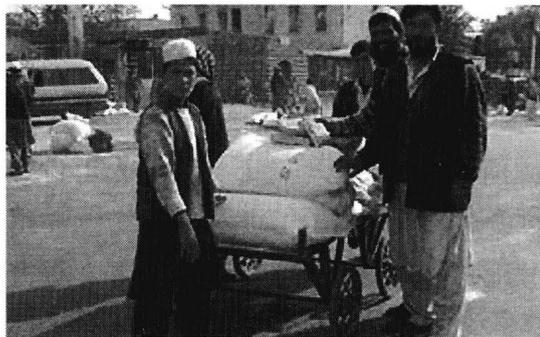
こうやって現在、660カ所の水源、これでも足りないということで千カ所まで増やそうとしておったわけです。そのうち500数十カ所で水を得まして、少なめに見積もって20万人、多く見積もって30数万人が難民化せずに村で生活を続けることができたわけでございます。



食べ物がなくても1週間ほどは生きられますが、水がないと24時間以上は人間は生きられない。これによってみんな水が出たことを喜んで、ま、苦労話は除きます。ペシャワール会の水対策本部で、蓮岡君という若い人を中心に組織化されまして、そういう事業が現在まで続いてきたわけです。

さらに我々、大旱魃なんて、こんな大事件が……ニューヨークの事件も目撃者が、「映像でみるよりすさまじいものがあつた」とおっしゃってしまし

たが、アフガニスタンの早魃もまさに実感でございまして、そばにいるほうは緊迫感を憶える。とても容易な状態ではない。



私たちとしては、今から来る冬が厳しいと、見ています。巨大な難民キャンプと言ってもいいカーブル市全体が危機にさらされております。冬を越せない人が1割はいるだろう、10～15万人は市内だけで犠牲者が出るだろう。その前に彼らは移動するでしょうから、そうなると大混乱に陥る。とにかく難民を出さない活動ということで、緊急の食料配給を開始したわけです。

「いのちの基金」というのをさっそく設立しまして、輸送を開始しております。現在、すでに10分の1の約500万トンが到着いたしました。そして千トンが配られたところです。しかし、第1期はここでやむなく中止です。ジャララバードという水計画がすすめられていた村の、政治とか軍とはなんの関係もない、かつて我々が井戸を掘った村のひとつで死者が240名

出ている。これは現地から毎日報告を受けていますので、かなり正確な数だと思います。北部同盟が敵対する人々に迫害を行なった。300名の首が斬られたそうです。それでもペシャワール会は現在、3カ所で小麦を配給しております。

こうして、私たちの活動は、ひとつ問題が解決するとまた次がくる。そうこうするうち私も白髪頭(笑)になってきまして、まさに冴えないバカボンパパ(笑)になってきたわけです。

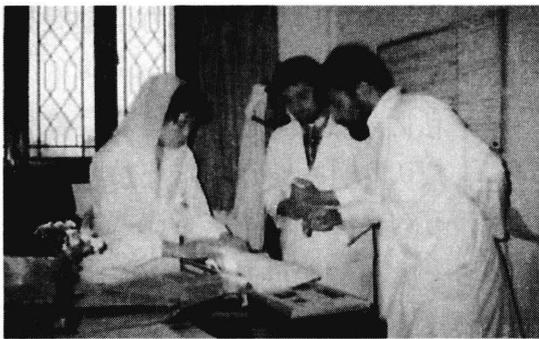
この18年間の活動を振り返って、私たちは思います。こうやってバタバタして何かに追われ、目前の一つの課題が片づくともまた次の課題があらわれてくるなかでアフガニスタンの活動をして、帰って来ると日本人全体の様相が変わっている。目つきがみんな違う。何かに取り憑かれたような感じがする。私たちは同じスタンスで仕事を続けている。でも何となく現地の実情を伝え「タリバン、そんな悪い人たちじゃないですよ」と言うと、「先生、タリバン派ですか?」と。「いや、あんな所をまた痛めつけなくても」と言うと、「国の方針に反するの?」と。

考えてみますと、私たちが正気でおられたのは、実は現地に係わってきたせいではないかと思うわけです。世の中がどんなに変わっても、変らないもの

は確かにあります。それを見つめてる限り、我々は狂気に流されずにすむと、かえって今は感謝しております。

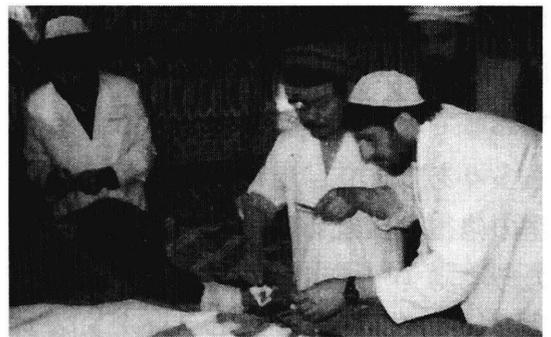
「一遇を照らす」という言葉があります。

私たちは決して、全世界を救おうとは思わない。難民を出さない、国内救助に徹する。現地の活動も、縁あって仕事を続けているわけです。よくある質問というのは「先生、なにもあんな変ったところに行かなくても」と。日本にもけっこう困ったところがあります。それはそれで大事ですけど、私は縁あってこんな仕事に就いたわけでした。「あなた、結婚しとりますか」と、「なんで今の奥さんじゃないといかんとですか」というと「そりゃま、縁があつて」というわけです。そりゃそうでしょ、人類の半分は男と女ですから、誰でもいいかということそうでもない。



われわれは自由とはいえ、いろんな制約のなかで暮らしております、男である、女である、鹿児島に住んでい

る、日本人であるという制約。職場の制約、年齢の制約、今の時代に生きておるといふ制約、いろんな制約のなかで暮らしています。そのなかで自分たちにできることは何か、とすることでございまして、大げさな天下国家を論じる必要はない。自分のできる範囲で自分のよしと思うところ、私たちの場合は「いのちを大切にする」という視点で活動が続けられていくのではないかと。



一遇を照らすということで、世界を照らそうとすると爆撃しなくちゃいけない。案外、私たち自由だと錯覚しておりますが、不自由なものでございませぬ。そのなかで、私の最大限の力を尽くしていくということでもあります。たまたま縁あってこういう活動をしました。それによって自分たちが助かってきたのではないかと、思うわけです。さらに言えば、日本人の良心に支えられ、それを代表しているという誇りでございます。

## 会場からの質問に答えて

**Q** 地下水路の事を少し説明してください。

**A** これは、イランではカナート、アフガニスタンではカレーズと呼ばれるものでして、簡単にいいますと、地下水を地表に導き出す。約2000年以上前から行なわれておる灌漑用水です。地域によっては戦争のためにふさがっておったり、手入れを怠っておって水が出なくなっているところも多々あります。現在、36カ所で水路の修復が行なわれておりますが、そのうち30カ所前後で水を出しまして、なんと1万数千名がそれによって帰ってくると。嘘みたいな話です。「医者 井戸を掘る」という表紙の裏に地図があります。

**Q** アフガニスタンの活動のなかで、喜びはなんですか。

**A** あらためて言われますと……ま、うれしいのはやっぱり水が出たときですね。それから病人が治ったときですね。仕事をしてよかったな、と思う瞬間であるじゃないですか。具体的には、医者なら病人が治るとき、井戸掘りだったら水が出たとき。そのことを通して住民と心の交流

が出来ることが一番嬉しいんですね。逆に、困ったとき助けてもらうこともある、これも大きな喜びです。

現地はまだまだ人情がすたれてない。昔の日本みたいなところがありました。ほんとに、どうしたらよかろうかという時に、現地で助けてくれる人が現れる。私たちの気持ち伝わって、まるで私たちの代理人のように一生懸命働いてくれるのは非常に嬉しいです。我々、簡単に、人間はみなひとつとか、宇宙船地球号などと言いますけれども、こうやって我々が苦労した上に信頼関係ができておること。そのことが非常に嬉しいです。

**Q** どうして先生はアフガニスタン・パキスタンで医療活動をしたと思われたのでしょうか。動機をお聞かせください。

**A** 私に立派な志があって実に偉大な人で、それにみんなが感銘を受けてついて行っておるという話がわかりやすいのですけれども、実はバカボンパパです。

私はもともと山岳家、山歩きの人間でして、今から23年前、ヒンズークシ遠征隊の隊員として行ったのが始ま

りです。その後、現地がなんとなく気に入らして、あのあたりで山をうろうろしておりましたら、ある団体からペシャワール赴任の話が出ました。で「そりゃ、いい話だ。私はあそこば好いとりますから」ということで現地に行きました。それが運の尽きか、始まりです。

人間というのは、なんか「こうしよう」と思って成るといのは案外少ないことでして、なんか準備されてたのかどうか、山好きで遊んでおってそのうち仕事が舞い込んできて、次から次に難問をさばいてるうちに、とうとう年をとってしまったと。もう50を過ぎますとですね、ほかにすることがなくなつた、というのが偽らざるところなんでしょうね。

あんまり感動的な話ではありませんけど。それに、やはり義務感らしきものがあるとすれば、日本のペシャワール会4000名の希望を我々はしょっているという、ささやかな気負いがございます。それに支えられておったということもあるでしょう。

それから私は古い人間ですから、日本人があそこで賞賛——というのは語弊がありますが、それは日本人として嬉しいというのがありますね。いろんな人が集まって、私の仕事が続けられてきたんじゃないかと。しかもこれをサポートしてくれる現地の人がたくさん

ん——日本でも数千名、現地の協力者も間接的な人をいれると数知れず。この国境を超えた良心が協力しておる。そのことが、そりゃもうきつくて止めたと思ったことは何遍もありますけれども、なんとかふんばってこられたということではないかと。それで、よろしゅうございましょうか。

**Q** 私はガールスカウトです。ガールスカウトでは難民の子供たちあてにピースバック、文房具、日用品などを入れた袋を贈っています。旱魃による死者が多いようですが、現金のほうがよいのでしょうか。

**A** せっかく計画していることに反対を唱えるようで申し訳ないですが、日本人のアイデアよりも現地の人にとってなにが必要か、という観点からみますと、現地で必要なのはズバリ食べ物、しかも口に合う食べ物。先日の爆撃のとき、食料も投下したということですがけれども、私たちのところに入ってくる情報によりますと、みんな気持ち悪がって食べない。集めて破棄したということです。タリバンが率先してやった部分もありますし、地元民が気持ち悪がって食べない。

やはり現地で必要なのは現地の人の方に合う食物なんです。だから私は、お金を届ける、ま—小麦を届けるのは大変ですから、それで食べ物を買って

現地に贈るほうがいいと思います。そのために「いのちの基金」というものがありますので。

200円あれば、ひとり一カ月暮らせるわけですから、私はお金がいいと思います。

**Q** タリバン政権下では職場から女性が一掃されたということですが、事実ですか。またそれはどういう理由からですか。

**A** これは大事な点です。これもずいぶんゆがんだというか、報道と実態がかけ離れているので、ちょっと時間をとります。

タリバンが出現する以前、つまり共産政権が倒れてからの2年間、いまの北部同盟といわれる人たちがカーブルを治めておりました。ところがこれがまとものない政権でして、内ゲバをやって市街戦はあるわ、略奪・婦女暴行は日常茶飯。国連発表で1万5千名の市民が命を落としました。で、女の人はおちおち外に出られない状態だった。そこに秩序を回復したのがタリバンでありまして、初めは次々と厳しい布告を出して混乱を収拾しました。しかし、彼らの出した布告というのは、さきほど申しました農村の慣習法なんです。昔から何世紀もあった習慣なんです。そのなかでカーブル市内というのは特別区というふうに当時み

られておりました。ミニスカートをはいた女性が闊歩できる、西欧化した国王さまの城下町であったわけです。こんな女性は、ごく限られた超上流階級、特権階級であります。アフガン人というより、ヨーロッパ人のメンタリティに近い人々。このお嬢さんたちは国連に就職したり、外国のNGOに流暢な英語で就職する。こういう人たちの声が大きく伝えられた、といういきさつです。



ほとんどの女性は、タリバンが進駐してきたときホッとしたというのが現実です。だから女性ばかりでなく、いまカーブル市民はもとの暴君たちが戻ってくるのを非常に恐れておってタリバンに協力しているというのが、実情です。

しかし、タリバンが出した布告のなかに女性の教育禁止というのがありましたが、これを言うと語弊がありますが、タリバンは田舎者の政権なんですね。農村の慣習を都市の人に押しつけたが、主に西欧化した人たちを排除するためなんです。昔、日本でも鹿鳴館

という時代があって民衆が反感を抱いた。これによく似た状態であったのではないかと。実際には、私たちの診療所カブール5カ所で約50数名が働いておりますが、うち女性は10名以上。患者さんが女性であれば女医さん、看護助手など女性のスタッフが診るのが普通です。で表向きは女性の教育禁止でも、裏で「かくれ学校」というのがある。これはユニセフやNGOがやったりしている。でもタリバンは知ってて黙認している。これが現実です。とくにジャララバードという東の地域では、昔から女性に教育を受けさせるという慣習がありますので、タリバンを受け入れた以上、一応その布告もたてとかなきゃと。で、どうしてるかといいますと、ペシャワールに送りましてそこで教育を受けさせると。これはタリバンの幹部そのものが、自分の子弟をそうしてます。だから実態をみるとマスメディアとかなり違う。



それと、こういう女性差別などの問題で大切なのは、私たちにいわせると「じゃあ、農村の女性はどうなのか」

と。生きるのに精一杯なんです。病気の子供を抱えて何日も歩いたり、毎日の家事に追われまくっている。日頃からブルカを被っているわけじゃない、あれは一種の外出着なんです。これも何世紀も続いている貧困階層の慣習なんです。こうしたアフガニスタンの同一性といいますか、それに反対するような西洋的教育はこれを排除しようということで、厳しいお触れが出たということでもあります。

私が言いたいのは、女性の活動家が来て現地でいろいろもめ事を起こす。そしてロンドンやニューヨークでは凱旋將軍のように迎えられますけれども、私にいわせると「じゃあ、現地に残された、どうしてくれるんだ」と。

人間、生きてる世界なんてそう広いもんじゃない。私たちは現地に残って、それぞれの掟や制約のなかで暮らしている。そのなかでも、いちばん幸せな状態をどう確保するかということが私たちの課題であります。

自分の思想さえ満足されればいい、西洋の慣習が世界最高であるからみんななくちゃいけない、という強制的主張にはあまり賛成できない。そこで生きて死んでいくことを大事にしたい、と。これは大事な質問ですので、このことは特に述べておきたいと思います。

**Q** 「大した病気でなくてもニューヨークに治療にいける人もいる」というほどの貧富の差は、なんなのですか。さしたる産業もないと思われるのですが。

**A** さっき言いましたように、おそらく95%以上は農民と遊牧民なんです。タリバン出現以前は大地主制度——幕藩体制時代のお殿様に相当する人々がロシアの農奴に近い人々を使って地域を治めている、という構図が一般的でした。

これがアフガン戦争以来崩れまして自作農が中心ですが、当時の地主あるいはハーンといわれる藩主たちが非常なお金持ちです。こういう階級がカーブル市民として住む、と。外国ともコネがあっていつでも行けるといふことでもあります。彼らの収入源というのはかつて農民から吸い上げた地代です。そして現地はシルクロード以来、無税の国、つまり密輸で食ってる国なんです。物を無税で入れて周辺国にやや高くで売る。私もその一人ですが、現地は安いから買う。こうやって貿易の利ざやで食ってる。この投資に回せる資本を持つてるのは、元地主階級、そういうことです。

**Q** アフガンの大部分の人たちは、今回のテロをどう思っているのですか。

**A** テロそのものに対しては、彼らは非常な嫌悪感をもっています。なぜかというとなら自身は二十数年間、内戦で肉親を失った人ばかりなんです。敗戦直後の日本人のように、遺族のない人はいない。それも理不尽な殺りく行為で失ったという人がほとんどです。暴力行為への嫌悪感是非常に強い。だからテロに対する同情というのは強い。

日本人より生々しい現状を知ってるだけに、罪もない人がやられることに対する同情は、初めのうちは強いものがありました。しかし報復攻撃でその矛先が自分たちに向かってきたところで、反米感情が本格的に盛り上がってきたというのが現実ではないかと思えます。もともと反米英感情が強い土地でございましたが、このことによって抜きがたいものになりつつあります。

ついでに言いますと、現在のビンラディンのグループは、実はアメリカのCIAが中心になって資金と武器を供与して育てた。ソ連を倒す目的で、そうしてソ連が倒れてしまうとぼろ切れのように捨てたといういきさつがあります。これは米国に対する感情というのは、恨み骨髄ということです。

これはパキスタンも共通です。彼らは戦争を憎んでいるのであって、米国民自身を憎んでいるのではないというのが正確なんでしょう。

**Q** 井戸ひとつ掘るのに、どのくらいお金がかかるのでしょうか。また地下水はどのくらい持つものなのでしょうか。

**A** 井戸はピンからキリまであります。水脈というのはほんとにわからないんですね。極端な例では、3メートル掘ると水がこんこんと出てくるという場所があった。この場合は数千円で掘れます。ところが地層によっては、掘っても掘っても出ない。しかも大きな巨礫、自動車ぐらいの石が出てくる。そうすると、これを爆破するためにダイナマイトを使う。普通で30～40メートル、最高記録で58メートルだったと思います。こうなると10数万から20万円近くかかります。いろいろです。地層によってかなり違いますが、いままで660の井戸で使ったお金は4千数百万ですから、平均して一本の井戸で何もかも入れて5万から10万円、というところじゃないでしょうか。

井戸の水は、地球が冷えますと雪がたまりますから、1、2年かかりましょうが水がしみ込んで貯えられる状態なら、ほぼ永久に持ちます。けれどもいま我々が危惧しているのも、まさにその点でして、カレーズによっては水量がどんどん減っていく。さらに掘りすすむところもボチボチ出てきました。このまま地球温暖化が収まらない

と、やがて枯れる可能性が出てくるといふ無気味な話です。しかし、ま、数年間はいいだろうと、私たちはそれを使わざるをえないということです。

**Q** アフガン人と日本人に共通するところはありますか。

**A** 共通するものはたくさんあります。宗教こそ向こうはイスラム教、日本は仏教ですが、もともと、仏教の発祥地はあのあたりなんですね。仏像、この発祥地がアフガニスタンなんです。ガンダーラ地方というのは、あの地方なんです。

もっとも向こうの人は顔立ちがいいです、別嬪さんが多い、男の人もいいです。御釈迦様もハンサムですよ。東に行けば行くほど顔が平べったくなるということはありますけれども、こういった文化の発祥地ですから、かなり似たところがあります。もちろん、中国経由ですから、その間に修飾されたものもありますが(笑)。

わりと目立つものをあげますとお数珠ですね。これ、イスラム教徒みんな数珠してる。これ仏教の習慣だ、いやこれはイスラムの習慣だと。向こうのは数が100らしいですが、日本は百八つ。それからなんといっても、大家族制時代の日本人と非常によく似ている。目上の人にはきちんと従う、礼儀正しい。日本人は畳の生活ですが、ア

フガン人はカーペットの生活で、反射的に靴を脱ぎますね。それが畳の生活に似ております。そのあたりの清潔好きなところは、ほかの国では見られない点です。

それから人間の接し方、これも社会全体の基調が農業国家ですから、日本の農村と似た温かさというか、もちろん憂うつな人間関係もありましようけれども、身内を快くカバーする。そしてまさかと思われるでしょうけれども、世界でいちばん治安のいい国はアフガニスタンだったんです。私が9月に帰ってきたとき「先生、よくご無事で(笑)。あんなところであんた」と言われましたが、とんでもない。身の危険が多くなったのはアメリカの爆撃のせいです。それまで人々は平和な家庭生活を営んでいた。泥棒もいない。そんなことすると、手を切られるということもありますし。また義理がたい。私が山の中でおとした帽子が一週間かかって届けられたこともあります。昔の日本にあった義理人情が通じる世界、そんなところが似ています。

**Q** 多くの死に接するなかで、死に対して慣れてしまい、死に対する悲しみが薄れることはないでしょうか。

**A** これは、人間が人間である限りないでしょう。慣れというのは

たしかにあるでしょうね。ある状況下にあつては、自分が死ぬことそのことより、自分が死ぬことによってどういふことが生じるかという興味が沸くことはあります。

恐ろしいのは、殺し屋、つまり戦闘に従事する人たち、これは人を殺すのをなんとも思わないようになってくるというのは、たしかにあります。ただし、家庭生活に少なくともあるもので、両親であるとか兄弟であるとか、肉親の死を悼まない人はひとりもおらないという感じがいたします。

**Q** テレビの報道で疑問に思われることはありませんか。

**A** そうですね。初めは「無限の正義」とか、正義の米国VS悪の権化タリバンの戦いであつて、正義が勝つた。そして多数のアフガン民衆を開放した。これは分かり易いですが、まったく異なった出来事だと思います。だいたい絶対の正義というのはあるのか。普通、死刑宣告は、じゅうぶん証拠をとってしなくてはならない。サリン事件でさえまだ裁判中なのに、いきなりタリバン殲滅ということはない。

いまある報道は、一部の都合のいいところだけ摘みあげているにすぎない、と考えて間違いはない。現地から定期的に報告を受けていますので、間違

いありません。いま北部同盟が、パシュトゥン系のタリバンと目される人々を捕まえて虐殺している。そのために大半のパシュトゥン人は一路、東を目指している。かろうじて修羅場からのがれてきたスタッフの話では、路上に、数百あるいは千数百の死体が転がっていた、と。

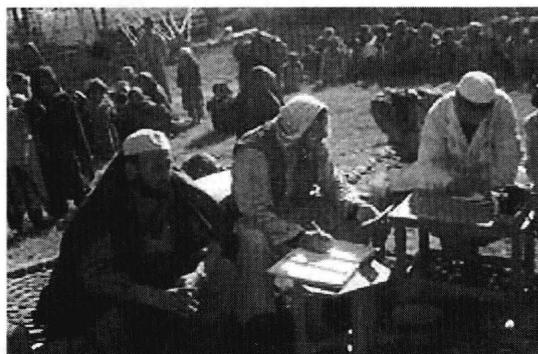
先ほどもお話しましたが、タリバン以前の状態を知る人はわかっていますが、カーブルでタリバン出現以前にいまの北部同盟がやったことといえば、内ゲバ、婦女暴行、強盗、略奪。私はさまざまな権力を見てきましたが、それに比べるとタリバンがいちばん血腥くなかった。これも世界認識と違っている。少なくとも治安は維持されていました。爆撃が始まる直前のアフガニスタンは、世界でいちばん治安のいい国、市民が欲しておったのは、まさにタリバンの保障するこの治安でした。全アフガニスタンでこれが乱れている。これにたいして市民としては、暴行を受けたくないですから旗をいくつか用意する。タリバンが来ればタリバンの旗を振る、米軍が来ればアメリカの旗、高度な技です。

日中戦争のとき、中国の村々が日章旗を掲げたのと同じことです。だから報道されている情勢は、「眉唾」でご覧になることをおすすめします。

**Q** 薬品などの供給はどうなっていますか。それと、診察は有料ですか、無料ですか。

**A** アフガニスタンではイラン製の薬——抗生物質なら日本の約30分の1です。原則として現地で買います。これによって経費節減できます。だから私たちとしては、露骨ですけども薬より金を送って、と。

治療費は、原則的に無料です。なるべく多くの人にといい考えで、原則無料。ところがペシャワールになりますと中流のお金持ちまでやってきますので、これを排除する意味で、15ルピー、日本円にして30円ばかり初診料として取る。それ以外はすべて無料です。



\*

中村先生、長時間有り難うございました。先生は明日早朝成田経由でまた、現地にお帰りになります。貴重な時間をさいて頂いて有り難うございました。最後に本日は若い世代が多数来ておりますので、何か彼らにメッセージをお願いできませんでしょうか。

\*

え、それほど私は偉くありませんので、「何をしていけないか」ということを、まず言います。

大人たちがすることを丸呑みしてはいけません。

出来上がったニュースを鵜呑みにしてはいけません。

それから、我々、自由のようで本当は不自由である。限られた情報のなかで生きている、ということを忘れずに

「ほんとは何が正しいのだろうか」ということを、とくに若い人に望みたいです。

若い人は公式発表を鵜呑みにせずに《本音はなにか》を鋭く見ていくことが大切なのではないか。我々、年寄りはいずれ死んでいく。後始末をしなくちゃいけないのは君たちですから、もうちょっと、世界を磨ぎ澄まして見る目を養っていただきたいと思っております。



## 追記

中村哲先生との出会いは、医学生を中村先生の活動しておられるパキスタンやアフガニスタンにボランティア研修に派遣したいと思い、その承諾を得るためでした。テロがなければ、まず、私が現地調査に行く予定でした。この構想はアフガニスタンに平穏が戻ってきた時点で、現実化する予定です。

皆様方が中村先生の「ペシャワール会」と私たちの「風に立つライオン」に対しまして、温かい眼差しを向けてくださることを期待しております。

(堂園記)

---

# ペシャワール会の紹介

---

## 会 則

- ①本会の名称をペシャワール会とする。
- ②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④会員は一口年額3,000円以上、学生会員1,000円以上、特別会員一口10,000円以上の年会費を納入する。
- ⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。役員の改選は毎年総会にて行う。
- ⑧毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑨本会の事務局をFARAHOUSE(〒810-0041 福岡市中央区大名1丁目10-25 上村第2ビル307号 ☎092-731-2372) 内におく。

振  
込  
先

郵便振替口座 01790-7-6559

口座名義 ペシャワール会

\*通信欄に「アフガンいのちの基金」宛てと明記  
下さい。

理想を抱く皆様へ～医療再生のための第一歩

## NPO 法人『風に立つライオン』

(特定非営利活動法人)

### 設立理念

理想という言葉は絶滅寸前の希少動物のように、日本から消滅しかかっています。これが絶滅しないように日本人の誰かが踏ん張らなければ、日本という祖国に未来はありません。私の上の世代が夢を食いつぶしつつあるとするのなら、次の世代である私たちは残された夢を皆で育み、子の世代、孫の世代へと伝えていく義務があります。

まず理想を抱き、その理想を実現するために夢を描き、そして夢を実現するために行動する。このことの“素晴らしさ”を、実際に示していく使命を最近痛切に感じています。私が今計画し、行動している行為はすべて「祖国再生」のための社会実験だと考えています。社会実験で培われたノウハウは社会資源になるはずです。今、日本に最も必要とされているのは、誰かが「私」を乗り越え、理想に挑むという社会実験です。社会実験は時と運が味方しなければ、遂行できません。私は『祖国再生』・『医療再生』のために、NPO 法人『風に立つライオン』を設立することにしました。

患者さんが、「愛されている」・「必要とされている」・「大切にされている」と心から思える医師を養成するためです。人々がこのような気持ちを持ち始めると、風通しのいい社会になります。

現場で現実モデルを作ると行政や政治が取り上げます。するとモデルが標準になり理想が広がります。しかし、前例を乗り越える勇気がないと、「今日の最高」も「明日には過去の遺物」になりかねません。私は現場が協力しモデルをつくり行政を変え、社会を変革するシステムを「new public」と名付けました。

「思いを諦めずに持ち続けると、真実は歴史に登場する。持続は、偶然を必然に変える」私はそう実感しております。まさに今、私たちはそんな歴史に立ち会っているような気がします。

ケネディはアポロ11号で月を目指す計画を立てた時、「We choose the moon」と演説しましたが、その演説の映像を観て、理想は“choose”するものであることを知りました。人類は月を目指したから月へ到達できたのです。私は、その時以来、「理想を現実に近づけるのではなく、現実を理想に近づけよう」と、いつも訴えてきました。すると理想に共感し、夢を共有しようとして下さる人が必ず出現することも学びました。

精神科医フランクは、アウシュビッツの収容所に囚われた時、収容所にいるからこそ人々を夢を見ることができたと書いています。収容所生活から解放された途端に生きる目的を失い虚無的になった仲間を多数見たそうです。今、私たち日本人は日本という無秩序な空間にいるため、理想を抱き、夢を描く感覚を何者かにもぎ取られています。しかし、少しずつ気づきはじめています。気づきさえすれば、一致団結し理想や夢を共有すれば、収容所さえも一歩理想郷に近づけられるように行動できるのです。

諦めてはいけません。絶望してはいけません。

青年よ大志を抱け、すると、老人も大志を抱きます。

皆様も是非理想を描き、夢に向かい一歩でも行動を開始してください。また、私の考えに共鳴し、夢を共有したいと思われた方は、協力して下さるよう切にお願いいたします。皆様と偶然のような必然の時空を共有したいと思います。

NPO 法人『風に立つライオン』  
(特定非営利活動法人)

理事長 堂園晴彦

## ～会員参加へのお願い～

医療再生への道を目指す第一歩としてNPO法人「風に立つライオン」は出発しました。

準備段階で計画していたことでしたが、17年に亘りパキスタン及びアフガニスタンを中心に医療活動に取り組んできた中村哲医師(NGOベシャワール会代表)の講演会を、昨年10月に開いて大変な集まり様でした。

すでに私たちの活動は始まっています。

第1回の「風に立つライオン」の旅の準備も進み始めました。応募者の中から選考され、いよいよ3月26日(火)には第一陣がインド・カルカッタのマザーテレサの施設に出発の予定です。

そのためにはどうしても組織母体を、より広め、より強め、着実に発展させなければなりません。

まず皆様の身近におられる方々に趣旨をご理解いただき会員としてNPO法人「風に立つライオン」に参加していただくよう呼びかけて下さい。

■ NPO法人「風に立つライオン」の会員になりましょう。

年会費…個人会員 5,000円

法人会員 1,000円

学生会員 2,500円

以上お支払い下されば誰でも会員になれます。NPO法人は、会員の会費と多くの賛同者の寄附によって運営されます。自立した組織です。そのために寄附へのご協力をお願いしています。

【会費・寄付振込先】	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 鹿児島銀行：武町支店（普通預金） 口座番号／1310718</li> <li>• 鹿児島相互信用金庫武町支店 口座番号／1137611</li> <li>• 郵便振替払込 口座番号／01770-3-41091 加入者名／特定非営利活動法人 『風に立つライオン』 理事長 堂園晴彦</li> </ul>
【事務局】	<p>〒890-0052 鹿児島市上之園町3-1 NPO法人『風に立つライオン』 <small>(特定非営利活動法人)</small> TEL・FAX099-812-5688 E-mail:Lion@dozono.co.jp</p>

### 【謝辞】

この小冊子が出来上がりましたのは、テブ起こしをして下さった岡山優子様と詳細に校閲して下さったベシャワール会の中島文子様、採算を度外視して作製して下さったかごしま美術印刷の方々、それと、いつも温かく応援して下さった石風社の福元様のお陰です。

思いが一つの形になりました。

有り難うございました。

アフガニスタンの問題は始まったばかりです。

多くの情報は、情報を提供する人が属する組織にとって有利なように、操作され提供されます。

私たちが必要としているのは、中村哲先生のように、情報提供者が自分の情報に誇りと責任を持っている情報です。

すこしでも、この小冊子が皆様の心に響けば幸いです。(堂園)

中村 哲医師の  
診つづけてきた  
アフガニスタン

定価500円  
(税込み)

発行日 平成14年2月1日  
発行者 NPO法人風に立つライオン  
編集者 熊 臣 嘉 昭  
印刷 かごしま美術印刷  
Phone:(099)252-6001